

## 7. 研究のまとめと今後の課題

以上の研究成果をもとにして、まとめと今後の課題の検討を行う。

○ 今回開発・実施した酪農体験プログラムのねらいは、保護者のアンケート記述や事後活動での園児の発言内容を見ると、十分に達成できている。牧場での豊かな直接体験と、それを友だちと共に振り返る事後活動を通して、子どもたちはいのちと食べのものの大切さに気づくことができた。この点については、年中組も年長組も大きな違いはない。幼稚園の教師と牧場の酪農家の慎重な配慮と計画的な指導があれば、4歳児から酪農教育は可能である。ただし、安全面と衛生面での十分な配慮が求められる。

○ 酪農教育カリキュラムの特徴である、領域横断的編成や2回にわたる牧場体験、豊かな事前・事後活動、そして図工展や親子料理教室等の発展的な活動は、幼稚園において、通常の多種多様な保育活動の中に組み入れることは多忙な中で大変なことではあるが、十分に実施が可能である。牧場での豊かな直接体験が基盤となって強い活動意欲が生まれ、長期間にわたる（約4か月）の活動期間中、途切れることなく子どもたちの関心や意欲が継続した。

○ 今回の酪農体験プログラムでは、保護者の教育的な役割が大きかった。具体的には、牧場体験時での安全の確保、牧場での子どもとの共通体験による気づきの深化と家庭コミュニケーションの活性化、そして親子料理教室における安全確保と共通体験等である。もちろん時間的・物理的制約のため全ての活動に参加してもらうことは不可能であるが、それを幼稚園での写真を使った掲示物の工夫や、保護者向けの実践アルバムの提供、そして図工展（展示会）への参加等を通して、多くの保護者に対してこの酪農体験教育の大切さを説明することができた。

○ ただし、アンケートの結果からみる限りにおいては、今回開発・実施した酪農体験プログラムが、家庭での牛乳の飲用習慣や調理習慣に強い影響を与えるまでにはなっていない。より長期的な取り組みが必要かもしれない。

幼稚園での酪農体験プログラムの開発と実施という前例のない困難な実践研究に、熱意と十分な配慮を持って臨んでくださった新宿区立鶴巻幼稚園の先生方と保護者の皆さん、榎本牧場の榎本求さん、さらには、一般社団法人中央酪農会議に改めて深く感謝したい。